

新聞は未来を拓くか



発行所

名古屋中学・高校新聞部
名古屋市中区砂田橋2丁目1番58号
TEL 052-721-5271



日本NIE学会の全国大会が、名古屋市中区の中高一貫男子校「名古屋中学・高校」を主会場に、二十三日始まった。今年のテーマは「真価問われるデジタル時代のNIE」価値ある情報を教育に。SNS全盛の今だからこそ、紙媒体の新聞と新聞が提供する情報の意義をあらためて見直す。同時にともすれば閉鎖的な「学会」を開かれたものにするため、映像配信などこれまでにない試みも盛り込まれた。

NIE学会名古屋で開催

NIEを研究・実践する氏、春香クリスティーン氏、教育関係者や学生など約二百五十人が参加し、報告やシンポジウムが行われた。意見交換が盛り込まれた後、新聞を教育に活かすため、大谷昭宏、九つのテーマに分かれたラウンドテーブルが設けられた。



NIEのこれから
羽田氏は「新聞を用いられたい」と述べた。新聞を教育に取り入れる有効性を示された一方で、議論は今日における新聞の在り方に及んだ。ネットに情報が溢れている現在、どこまで情報を新聞に載せるのか。大谷氏は、「ありのままを伝えることで、人を傷つけてしまうこともある」と、新聞が伝える情報がきれいごとで終わってしまうことを危惧する。

シンポジウム要旨

【市川正孝・愛知教育大学非常勤講師】私はアナログ時代の代表。昭和三十三年に教員になり、春から愛知大で教えている。NIEには三つの側面がある。学級新聞づくり▽言語活動▽友達との活動。メディアリテラシーにつながる分野を大切にしたい。NIEをどんな動機で始めても市民教育につながる。【春香クリスティーン・タレント】私は十六歳まで過ごした。テレビなどメディアについて学びたいと思っ

【司会】土屋武志・愛知教育大学教授「一九九七年から携帯を持ち、授業ではiPadを使う。デジタル化に賛成の立場だ。学習者にとって有利だから。スックラップはたまるが、デジタルだと簡単。電子黒板を使えば、一枚ものの新開提示の苦勞もなくなる。国語教育の観点では、誰かが記事を組み立てるんだという情報を間接的に受け取るしかできない。騙されないようにすること。大谷 日本メディアは親切。皆が本来の役割だが、それが人を傷つける

何をどういまで伝えるか



活発に議論を交わす参加者たち

意見活発

～白熱ラウンドテーブル～

実践絡め議論

なかでも、「報道と教育」のテーブルでは、震災を風化させないということを軸として東日本大震災など、災害の報道記事や刺激的な写真などをどのように教育現場で取り扱うかがシンポジウムの内容と絡め議論された。「国語科」のテーブルでは、新聞学習を通してどのようなことを教えていくか、実践記録を交えながら、現職教員、新聞社、研究者など様々な視点から意見の交換がなされた。「ICTとNIE」では、教室でのICT(情報通信技術)と新聞の活用について議論され、地域差を生かした次世代の授業づくりについて意見交換された。

開かれた学会 目指し新機軸

今回の愛知大会は、「開かれた学会」を目指した。通常の学会は学会員だけのものだが、愛知大会は一般公開され、学会員でなくても参加できた。なぜ、「開かれた学会」を目指したのかというと、NIEは、子どもたちを含む多くの市民に広がっていく「普及」に意味があるからだ。この学会の特色を紹介していく。



新しい試みの一つに、シンポジウムの動画配信がある。後日WEB上に配信される予定だ。



シンポジウムWEB配信

名古屋市中区にある専門学校「名古屋ビジュアルアーツ」の映像学科が撮影・編集を担当した。撮影は四台のカメラで行われた。担当した小野澤徳人さん（18）は「四台とも同じ映像では意味がない。誰がどのサイズで撮るかを分担したり、画面の切り替えをすることで、わかりやすい映像にしたい」と話す。雰囲気や伝わるように、聴衆の表情やうなずきを撮るといった工夫も凝らすという。同じくカメラを担当した小川阿由美さん（19）はシンポジウムの伝えたいことを逃さないことを意識する。そのため「撮影しているときから、その人の伝えたいことを表情や話し方の力強さから読み取りたい」と話す。また、音声を担当した中原花衣さん（19）は動画を見る人たちに心地よく届くような調整を心掛けるそうだ。



教育とメディアの関わりについてはどのように考えているのだろうか。彼らはテレビ放送を専攻している。小、中、高校時代の授業とメディアの関わりといえば、やはりテレビとの関わりだ。中原さんは小学校の英語の授業で見たNHK教育テレビの「えいごリアン」が真っ先に浮かんだ。英語自体に興味はなかったが、映像が面白かったため英語に親しむことができたという。小川さんは映像の力について「わかりやすさを挙げた。授業で薬物について学んだとき、映像でまとめてあることで、とてもわかりやすかったという。

学生たちが特別号発行

この新聞の発行も、新しい試みの一つだ。愛知教育大学の学生三人と名古屋中学校の新聞部の生徒二人が取材、編集を担当した。学生は事前に中日新聞社で特別講義を受けた。記者から新聞記事のレイアウトや文章の書き方を学んだ。シンポジウムを動画配信する名古屋ビジュアルアーツには、事前にインタビューを行った。わかりやすい文章で相手に思いを伝えることの難しさは、特別講義で実感していたが、インタビューでは、目の前の人に思いを伝える難しさを感じたようだ。



シンポジウムの記録を取る愛知教育大生ら

二十三日は、シンポジウム会場の設営の様子から取材を始めた。専門学校生が準備する様子や写真に収めた。シンポジウム、ラウンドテーブルの取材をした後、中日新聞に移動して編集作業をした。

中2階からステージの様子を取材する新聞部員ら



この名前は校歌「希望羽ばたく」の一節から取りました。現在の部員は全員中学生で、これまでに第五号まで発行しました。校長先生へのインタビューや、高校サッカー部員との交流など、愛知大会初優勝の取材、愛知祭での即日発行などを行いました。発行した新聞は全校生徒に読んでもらっています。

制作体験記

非常に貴重な体験をさせていただきました。大変多くの方々に支えられながら一枚の紙面を作ることができました。新聞製作にご協力いただいたすべての皆様に、この場を借りてお礼を申し上げます（久郷舞子）

普段何気なく読んでいた新聞。流れるようなレイアウト、わかりやすい文章構成、自然に読むことができるための技術が隠れていることを知りました。この経験を教育に活かしていきたいと思っています。（深谷昌弘）

「一瞬」とらえる 新聞部奮闘

学会会場となった本祭での即日発行などを行いました。発行した新聞は全校生徒に読んでもらっています。部員は長らく休部していましたが、一昨日復活を果たしました。歴史は古く、「名古屋中学高校新聞」のタイトルで、百二十四号まで発行されたことが確認されています。（西秀忠・藤島健太）

いかがでしたか新校舎 名古屋中学高校を紹介

この名古屋機と椅子を手で運んだセルモットーは「敬神愛人」屋中学・高うです。六八年に名古屋です。これは神を敬い、校は、アメ学院中学・高校と校名を神から与えられた自己のリカ人宣教改めましたが、二〇〇〇能力を社会のため人のため師フレデリに名古屋中学・高校へめに惜しみなく用いなさック・C・と名前を戻し、現在に至り「という聖書の教えに基づいています。

開校した私立愛知英和学校（九月に名古屋英和学校と改称）が基になっています。一九二〇年（大正九年）に名古屋中学校に改称。五五年（昭和三十年）に現在の大幸新校舎に移りましたが、このとき生徒たちは自分の



本校はキリスト教主義シンボルでもあるチャペルと、一昨年に完成した名古屋の南五百名ほどのスクールの新しい校舎、人工芝のグラウンドです。校舎には天文台や屋内プール、柔剣道場、大小二つのアリーナ、トレーニングルーム、メディアセンター、冷暖房完備の教室などがあり、学習やスポーツに取り組める環境が整っています。（野川陽介）

ドラゴン号で印刷しました

「ポプラの緑」のNIE学会特別号は、中日新聞社の移動新聞製作車「ドラゴン号」で発行しました。本社で使っている紙面編集端末と同じ機能を持つモバイル端末に加え、高速印刷機を3台搭載。その場で編集から印刷まで行うことができます。そう。小さな新聞社なのです。ドラゴン号は、大きな事件や事故、災害現場に出動し、その場で号外を発行します。このほか学校の求めがあれば運動会や文化祭、大切な式典、出前授業などに合わせて出動し、その場でA3判カラーのミニ新聞を発行します。掲載する

